猪の目、鬼瓦、ほか

2021年02月04日

春日

龍、魔除けの見直し

※メドゥーサ	中東、ギリシャ神話に起源を持つ、邪気をはらい侵入者を防ぐ怪物。
※ナーガ	インド神話に起源を持つ、蛇の精霊。コブラのいない中国では漢訳経典において「竜」と翻訳。
※みずち（蛟）	日本の神話・伝説の水神。
※龍	恐れの対象から守護神へと変容
※猪の目	恐ろしいものから「魔除け」に変容

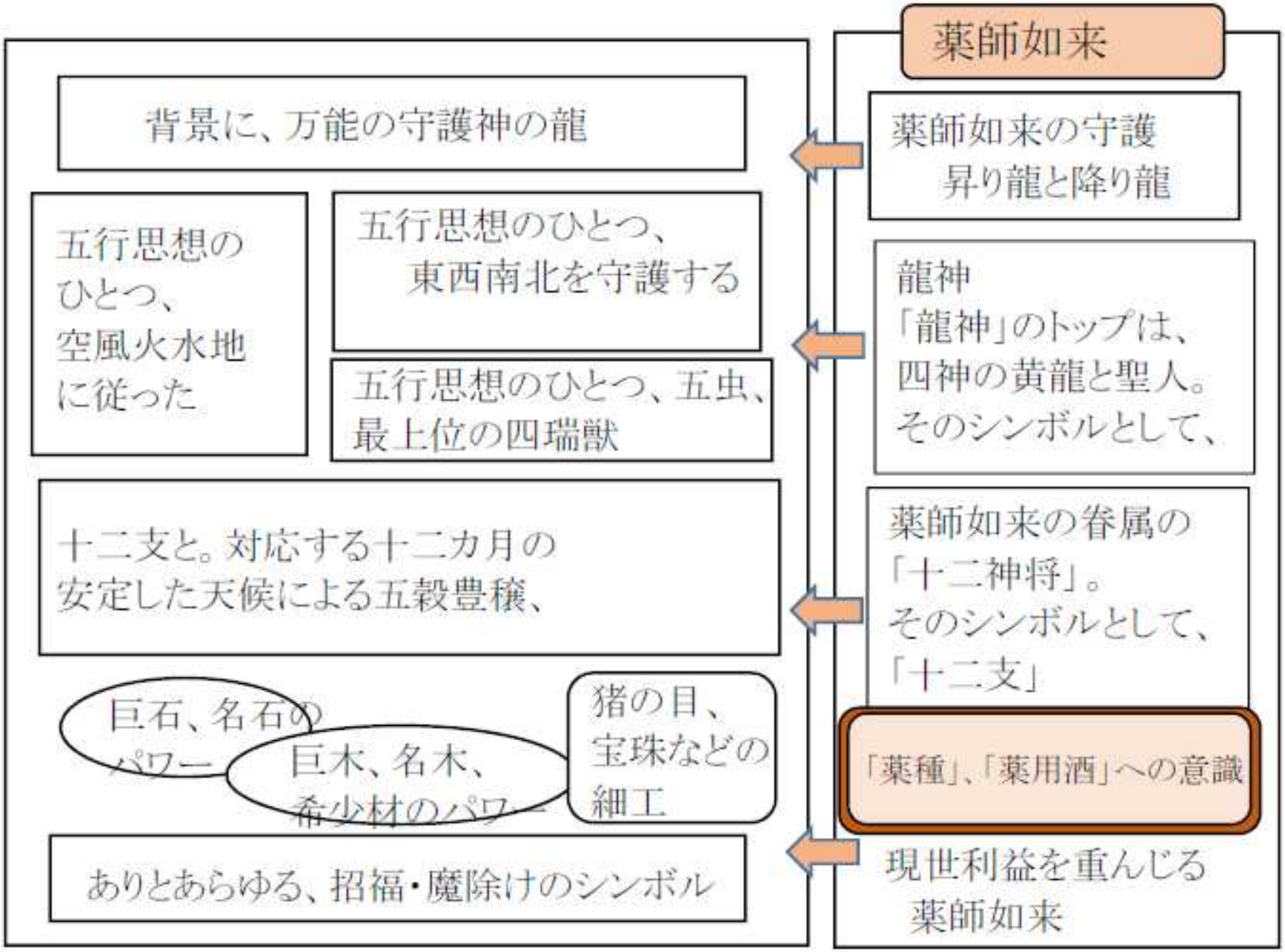
十二支、四霊獣の見直し

※薬師如来	両脇に日光と月光の2菩薩、 周囲に十二神将を従える。
※十二神将	薬師如来の世界とそれを信仰する 人々を守る大将で、十二の方角を 守っていることから、干支（十二支）の 守護神としても信仰。
※四霊獣	四方の守護神

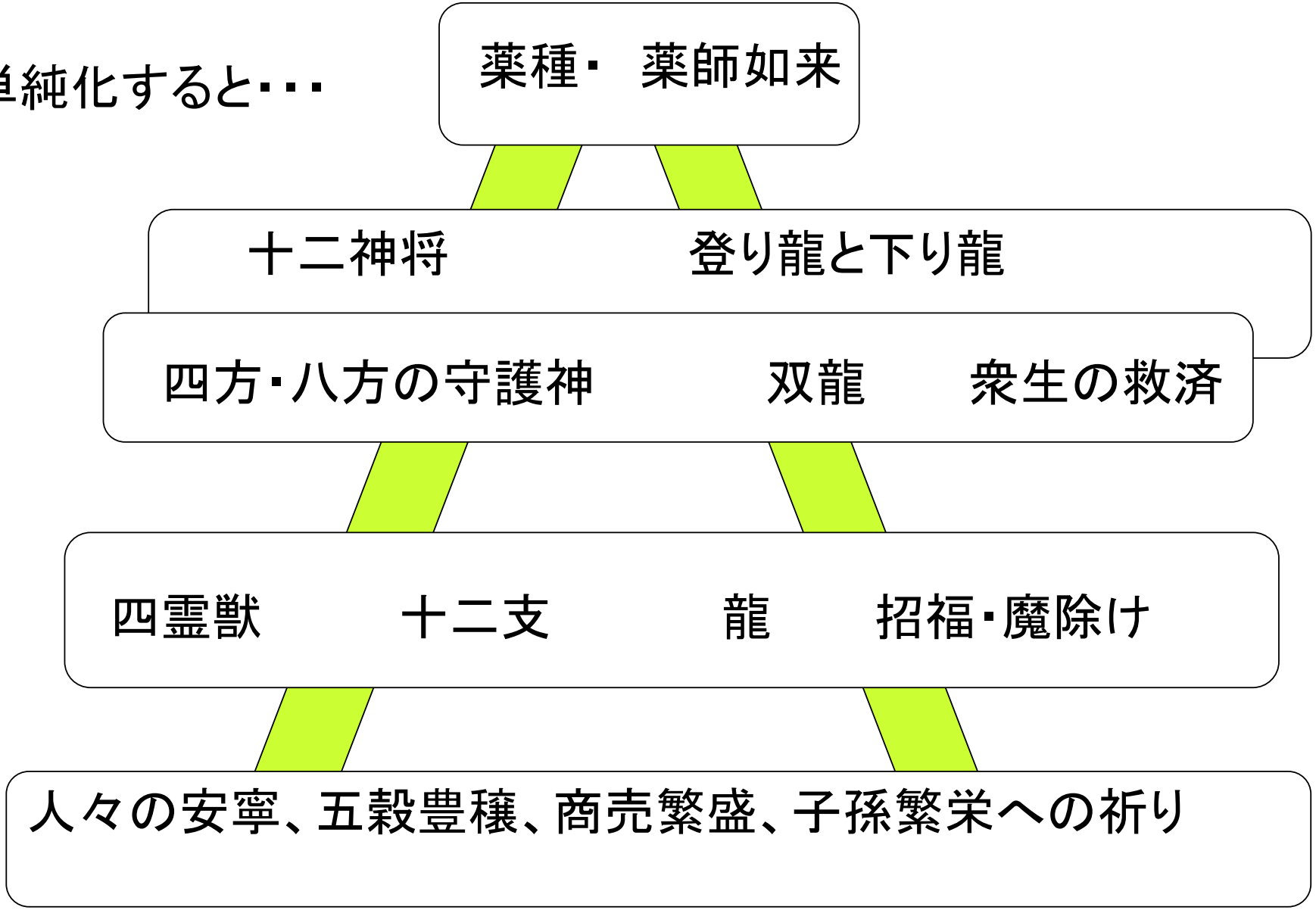
仏法

※守護神で 暗喩	龍、不動明王、宝珠

仁太郎ワールド


薬師如来
背景に、万能の守護神の龍
薬師如来の守護
昇り龍と降り龍
五行思想の
ひとつ、
空風火水地
に従った
五行思想のひとつ、
東西南北を守護する
五行思想のひとつ、五虫、
最上位の四瑞獣
龍神
「龍神」のトップは、
四神の黄龍と聖人。
そのシンボルとして、
十二支と。対応する十二カ月の
安定した天候による五穀豊穣、
薬師如来の眷属の
「十二神将」。
そのシンボルとして、
「十二支」
巨石、名石の
パワー
巨木、名木、
希少材のパワー
猪の目、
宝珠などの
細工
「薬種」、「薬用酒」への意識
ありとあらゆる、招福・魔除けのシンボル
現世利益を重んじる
薬師如来

単純化すると・・・


薬種・　薬師如来
十二神将
登り龍と下り龍
四方・八方の守護神
双龍
衆生の救済
四霊獣
十二支
龍
招福・魔除け
人々の安寧、五穀豊穣、商売繁盛、子孫繁栄への祈り

薬

薬師如来に随う登り龍と下り龍

人々を災いから救う龍

メドゥーサ（中東、ギリシャ文明）

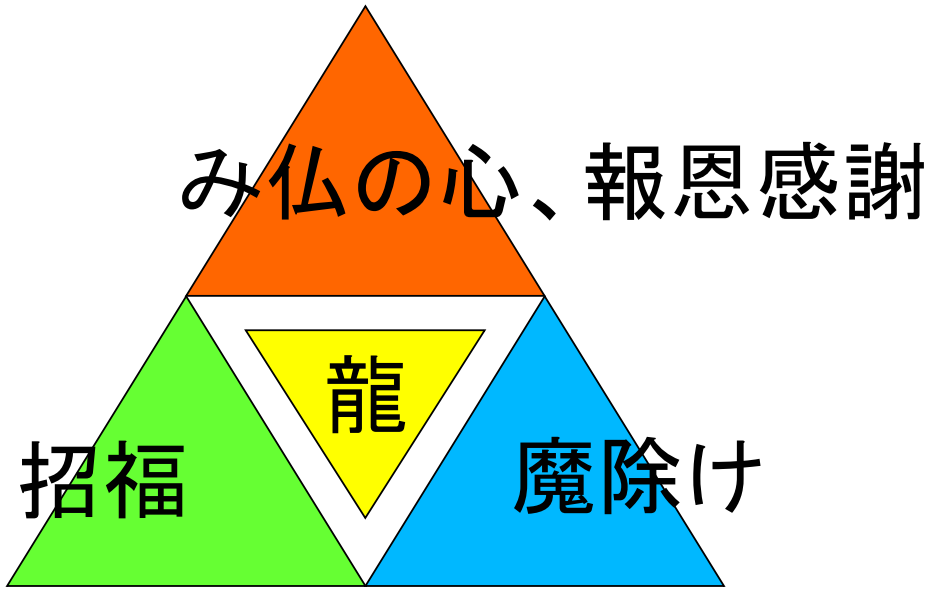
鬼瓦（日本）～龍と合体し、守護神

猪の目　～日本の古来からの魔除け

慈悲にあふれた空間

守護神、招福、魔除け

守護神は、招福というより、魔除け。
～　サフラン酒のいろいろな装飾は、
下図に集約できるような気がしています。



まずは、薬から

薬

薬師如来

薬師如来に随う登り龍と下り龍

人々を災いから救う龍

守護神

薬師如来と宝珠

登り龍と下り龍を随える薬師如来

龍は、怖いもの、恐れの対象から、

守護神へと変化

村松･医王山円融寺の本堂欄間
龍の彫刻（江戸末期の作）

仁太郎が伊吉を連れて
再三、訪れたという

魚沼・西福寺開山堂

石川雲蝶作
道元禅師猛虎調伏の図

次は、魔除けから

メドゥーサ（中東、ギリシャ文明）

鬼瓦（日本）

鬼瓦に巻き付く龍も、登場

メドゥーサ　(中東、ギリシャ文明)から
東漸し、日本で鬼瓦に取り入れられた。

恐ろしいものが、魔除け、守護神へと
変容

メドゥーサ（Medusa）
邪気をはらい侵入者を防ぐ怪物

Mid-6th Century B.C.

570 B.C.

蛇を巻いた髪、大きな耳.

ギリシャ・ローマ文明から中東の王国に
引き継がれ、さらにインド、中国を経て
日本へ

恐ろしいものが、魔除け、守護神へと
変容

a ridge end tile with the figure of a devil

メドゥーサ
紀元三世紀ころに滅んだ隊商都市パルミラの
地下墓の入り口に、飾りとして存在

紀元前１世紀～３世紀のパルミラ
「パルミラ遺跡　夜、朝」 平山郁夫さんの大作

みずち（蛟；古訓は「みつち」）は、日本の神話・伝説で水と関係があるとみなされる

竜類か伝説上の蛇類または水神。

ナーガ は、インド神話に起源を持つ、蛇の精霊あるいは蛇神のことである。

元来コブラを神格化した蛇神であったはずだが、コブラの存在しない中国では漢訳経典において「竜」と翻訳され、中国に元来からあった龍信仰と習合し、日本にもその形式で伝わっている。

日本で
鬼瓦に

鬼瓦に巻き付く龍
清水寺三重塔　創建は 平安初期(841)

龍は雨を呼び 火を防ぐ守護神
鬼瓦の厄除けと合体したと
みることができる

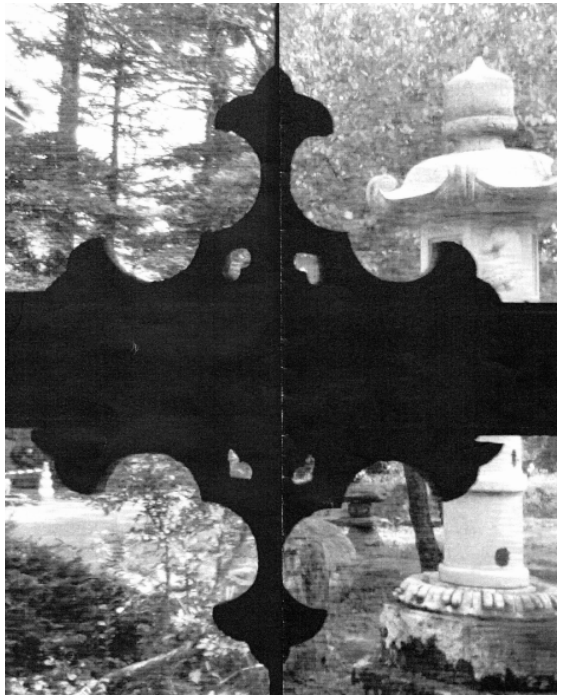
サフラン酒
主屋の鬼瓦

サフラン酒
主屋の鬼瓦
(左右の拡大)

農耕の始まった縄文時代、人々が
栽培した食物を食い荒らすイノシシを
恐れた。

猪の目も、恐ろしいものから
「魔除け」に変容したと考えられる。

サフラン酒の離れ、猪の目



(編集しています)

猪の目は、日本の古くより、
魔除けのシンボルに使われてきた。

近世では、武士の刀の鍔、社寺の
棟木の端や鈴に見られる。

更に、縄文土器にも、見ることができる。

(蛇、カエルは再生のシンボルであり、
　イノシシは魔除けのシンボル)

四次元との対話

縄文土器論

岡本太郎

縄文土器の荒々しい、不協和な形態、試探的に心構えなしにふれると、誰でもがドキッとする。なかなか手に負えない、強烈な個性の土器の前まではまた言葉を絶するのである。

激しく迫りかぶさり合ってうごめく、凄絶、下品し、狂乱する情緒感。これでもかこれでもかと神経に迫る緊張感。しかも純粋に透った神経の強さ。常々芸術の本質として超自然的衝動を主張する私でさえ、思わず圧倒されてしまう迫力である。

通常考えられている和かで優雅な日本の伝統とは全くの反対物である。従って伝統愛好者や趣味人達には、敬遠するかに受け入れられないらしい。逆に、そこには世界の最古の前衛がある。一体これが我々の祖先によって作られたものなのだろうか、という疑問が起って来るのも一概無理ないことではない。縄文式土器や埴輪などには我々に迫る汎潮日本的感性を素朴に看取することが出来る。しかし縄文式はそもそも貝塚の如くであり、直ちに伝統と結びつけては考えられないというのが一般的な見方のようだ。

縄文式の荒々、豪放な、いやったらしい程逞しい美感が現代日本人の神経には到底堪えられない、やきされないという感じがする。そこで己の神経の範囲で感覚し、自動的に伝統の母胎に置いて考えるのである。

確かに文化史的に見ても、また形態学上からも、縄文式とそれは後の文化との間には一応の連続がある。次の弥生式と現代日本は一つの系統として通っている。しかし、だからといって無論的な連続のみが伝統であって、それと断絶した縄文式は伝統と無関係であると考えるのは余りにも機械的であり、浅薄である。

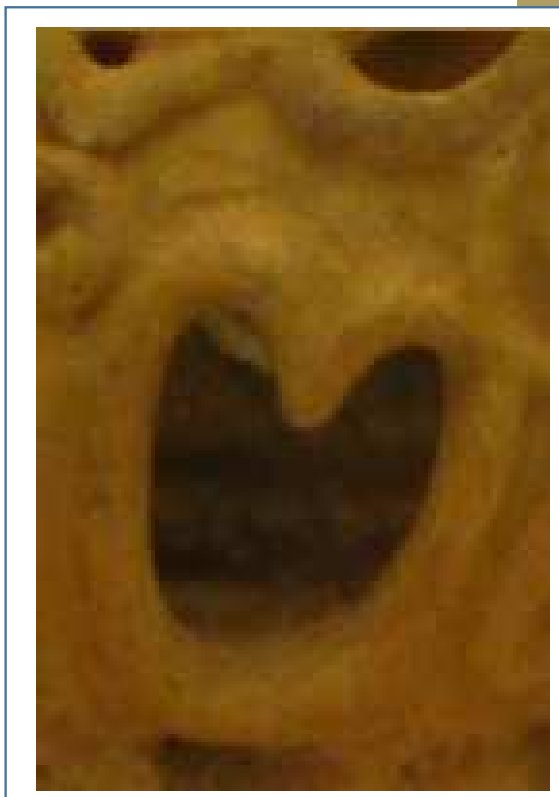
いったい伝統とは何であろうか。やっ機械にそれるが、この問題を明確に解いて行かない限りは何なる精密なる考察も無駄である。現代の日本人として主体的に縄文式文化を把握することは出来ない。本論に入る前に一応この点を解剖してみたいと思う。

我々が伝統と考えるものは己の外にあるのではない。それはまず自己の過去である。己というものを主体にし、常にそれを通して過去を見るのだ。そして我々は決して客観に見ているのではない。己のテンペラメントに符合させ、都合のよい面だけを取り上げる。いかれば恣意、無意識に、己の与えられた位置を正当化する為の努力が本能的にはたらくのである。私はそれが悪いとふうのではない。実際に、自己を外にして成立つ伝統というものは決してあり得ないからである。

伝統とは何らかの形に於てそれに己を賭けるものであり、主体的にあるものである。だからこの場合自己は絶も積極的な動機である。自己が実感化されればする程と却って断絶の相貌

岡本太郎・縄文土器論

火焔型土器
の猪の目



もうひとつの魔除け

外国では「聖なる石」として崇められ、日本でも
魔除けの朱（赤）をまとった石として大切にされて
きた名石の『赤玉石』が、屋敷のあちこちに、
そして糸魚川翡翠です。

赤玉石は、縄文中期には矢じりとして使われ、、弥生時代には管玉などの装身具に
利用されたといわれています。

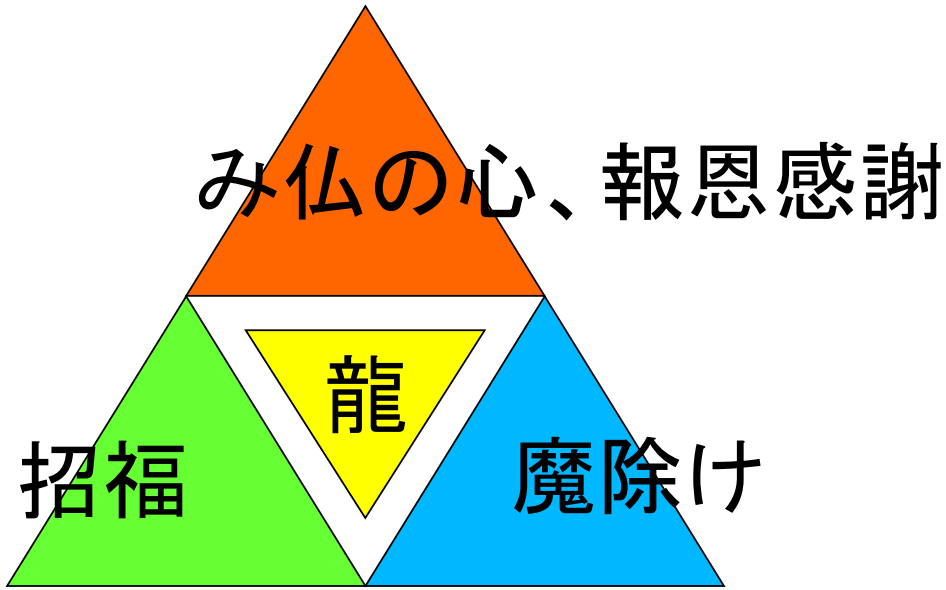
糸魚川翡翠は、縄文時代には祭祀・呪術を司る呪術者が身につけ、古墳時代には、
古墳に入れて儀式、さらに魔除けや蘇りのシンボルとされていました。

猪の目、そして赤玉石、翡翠。
まさに、いにしえからの魔除けの、
オンパレードなのです。

仁太郎さんにとって、
信仰とは何であったか。

仏法とは何であったか。

おびただしい数の龍の意味
　龍、鯉、不動明王、･･･。

そして魔除け。

守護神は、招福というより、魔除け。
～　サフラン酒のいろいろな装飾は、
下図に集約できるような気がしています。